

夕顔の巻（あらすじ）

十七歳の源氏の君は、亡くなった先の皇太子のお后（未亡人）の六条の御息所のもとに忍んで通っている。

夏のある日、五条に住む乳母が病気で尼になったので、御息所のもとへ行く道すがらに見舞いに行くと、近隣のみすぼらしい家の垣根に白い夕顔の花がつつを伸ばして微笑むように咲いているのに心惹かれる。するとその家から、香を焚きしめ歌を書き添えた白い扇にのせて、夕顔の花が源氏に贈られた。どんな女性がいるのか興味をおぼえた源氏は返歌をし、忠臣惟光にこの家を探らせる。さてこの日の目的である六条御息所は比べるもののない程格別だったが、年上であることを気にする彼女の自尊心と教養の高さ、思い詰める性格を、源氏は気詰まりに感じている。源氏は朝帰りの道に夕顔の家の前を通り、昨夜の一件が思い出す。惟光の計らいで源氏が粗末な装いで身分を隠して女のもとに通うようになると、六条の御息所の邸からだんだん足が遠のき、御息所はそれを辛く思い詰める。

夕顔は夜になると現れる正体不明の優美な男君を不思議に思うが身元を突き止められない。夕顔もまた身元を明かさないので、源氏はこの秘密の甘美な逢瀬にのめり込んでいき、身分違いとは知りながらも夕顔を引き取りたいと思う。

八月十五夜（満月）。夕顔の家に泊まると朝方隣の家々のいやしい男達の話し声が聞こえるので夕顔を近くの荒れ果てた院（館）に連れて行く。夕顔の侍女の右近が付きそう。館はたいそう不気味で、恐ろしがる夕顔に、源氏は初めて自分の顔をみせる。おっとりして、無心に身を委ねている夕顔があまりにいとしく、六条御息所の息苦しさ比べてしまう。

その夜、夢枕に美しい女が恨み言を言いながら夕顔を責めている。はっと起きるとあたりはたいそう不気味。灯りを持ってこさせて見ると、夢に出てきた女が一瞬見えてふっと消え、夕顔は死んでしまっている。当時はあまりに美しい人は魔物（mononoke 物の怪）に魂をとられてしまうと信じられていた。源氏は気も動転、不在の惟光を待つて恐ろしい夜を必死に明かす。

朝になって惟光が東山の寺に夕顔の遺体を運ぶ。源氏は自邸二条院に戻るが、17日の夜、馬でこっそり別れを告げに行く。源氏の君はすっかり病気になるってしまったので周りを心配させるが、主を失った右近を引き取る。一月以上もたつてやっと回復し、右近を呼んで秋の夕暮れの庭を見ながら夕顔の思い出話をする。右近の話では、夕顔は三位中将の娘で悪い身分ではなかったが、父が亡くなって後盾がなくなったところに、頭中将が見初めて通っていた。が頭中将の正妻に脅され五条の粗末な家に隠れ住んでいたところを源氏に見いだされたのだった。源氏は秋の庭を見ながらしみじみとはかない恋を思う。

京ことば源氏物語 女房語り

山下智子 やましたともこ プロフィール

京都市出身。仲代達矢主宰無名塾に入塾 六年の活動後移籍。

三島由紀夫近代能楽集「道成寺」「熊野」はじめ舞台、TVにて活動。

二〇〇三年より声の表現中心に活動。NHKラジオドラマに六年間のレギュラー出演と脚本執筆、映像番組のナレーション、詩とダンスのコラボレーションや、カシオ電子辞書での古典朗読、大修館書店古典教科書CD、i podピクセラサウンドブック等での朗読など。

中井和子先生との出会いから源氏物語の京ことば語りを始め、現在はフリーで「京ことば源氏物語」の女房語りを通し、失われゆく美しい京ことば、やまとの心を後世に伝えるべく、全五十四帖隔月連続公演をはじめ各地で語り会をひらく。古典の日推進委員会語り部派遣事業講師。京都国民文化祭特命大使。

公式サイト <http://www.genji-kyokotoba.jp/>

ブログ <http://d.hatena.ne.jp/kyokotoba/>

【中井和子 プロフィール】

京都市出身。京都大学文学部国文学科を卒業。

京都府立大学短期大学部教授を経て、京都府立大学名誉教授。

主な著作

「京ことば源氏物語」（大修館書店）

「尼門跡の言語生活の研究調査」（共著／風間書房）

「源氏物語一かさねの世界」（大修館書店）

「源氏物語—いろ・にはひ・おと」（和泉書院）

「源氏物語—折々のこころ」（大修館書店）

「源氏物語と仏教」（東方出版）

「21世紀によむ日本の古典6 源氏物語」（ポプラ社）他
二〇〇九年一月二八日永眠。

